

旭原入植五十周年記念誌

旭原



春の大源太山



秋の大源太山

ふるさとにおくる歌

頭上に太陽ふりそそぎ
くわを持ちたり村人の
額に汗して今日も又
働く姿の尊さよ

広げよのばせよ

この土地を

ああわれらの大自然

自然の宝物大源太

四方を小山に囲まれて

風雨にいく百いく千年

そびえる姿の雄々しさよ

山彦にこだますたか峰に

ああわれらの大自然

静かに澄みしダムの水

四季の変化をありありと

村民の心を映すように

今年も豊作明るいえがお

幸あれはえあれこの村よ

ああわれらの大自然

三十八年七月十五日

(鈴木スミ子 十六才作)



もくじ

御挨拶	旭原町内会長 腰越 恒良	1
旭原の位置と時評	編集委員	2
旭原の概要		4
旭原入植の経緯		5
入植施設補助事業の概要		7
開拓当時の事業費の概要		7
五十年の歩み		9
大源太と共に(回想)		13
五十年誌に寄せて	清水 正三	15
私の思い出の数々	原沢 義定	16
思い出	片桐 ユキ	17
開拓史上一番の喜びについて	並木 晴政	18
五十年を迎えて	今村 清子	18
開拓に寄せて	南雲三喜雄	19
住宅建設について	小野塚憲昭	21
私の思い出	高橋 一雄	22
一畳庵 素風の作	(高野忠重)	23
みてわかる感動する在りし日の旭原		25
人口及び世帯数の推移		33
入植者及び二代目一覧		34
町内に有する施設の概要		37
旭原の共有財産		40
あとがき		41

旭原入植五十周年記念誌

大漁太

旭原町内会長

腰 越 恒 良

旭原町内も本年を以て、入植五十年を迎えることが出来ました。

昭和二十二年入植当時から、実に半世紀、時の流れの速さに、驚かすにはられません。

現在快適、文化的な生活を営んでいるわけですが、旭原がここまで発展しようとは、誰も、想像し得なかったことでしょう。

今思うに、すばらしい旭原があるのも開拓当時衣食住もままならない中、睡眠時間も惜しんで開拓に励み、あきらめることなく、一つ一つの積み重ねがあったからだと思えます。その忍耐と頑張りには、我々に想像もつきません。それが大きな原動力となって、今の旭原があるものと確信します。本当に、初代の方々には、敬意を表します。

この度、二代目の熱意の基、旭原の生い立ちを後世に残すため又、五十年の区切りを付けるために、先代のご苦労を知り、歴史の一ページをつづるため、記念誌を刊行する運びとなりました。

旭原の今日に至る経緯を記録し、我々二代目のみならず、孫子の代まで語り継がれ、二十一世紀に向けて更なる村づくりの糧となれば、幸いに存じます。

最後に、編集に携わった方々、ご助言、ご寄稿、資料の収集等ご協力下さった方々に、感謝申し上げるとともに、旭原の更なる発展を祈念しご挨拶いたします。

日本国の終戦直後は、食糧事情、就労事情が極度に悪化し、国民経済は崩壊同然であった。そんな情勢化にあつて、数百万の復員者、満州などからの引揚者が相次ぎ、自ら食糧を確保することが急務であつた。国家再建策の一環として、失業対策と食糧増産の二つを旗印に発足したのが、戦後開拓事業の始まりであつた。重要国策として、昭和二十年十一月「緊急開拓事業実施要項」が施行される。

施策により開拓された地区は、新潟県内だけで六五地区が存在する。旭原地区もその一つである。

旭原地区は、湯沢駅から最東端八・五キロメートルに位置し、南は群馬県に接し、東は塩沢町に接している。集落の東側には、魚野川の支流大源太川が低地を縦断しており、標高五四〇メートルの高台に住居、耕地を有す。近年は、湯沢町の観光地としての一翼も担っており、訪れる観光客は、年間四万人にも及ぶ。

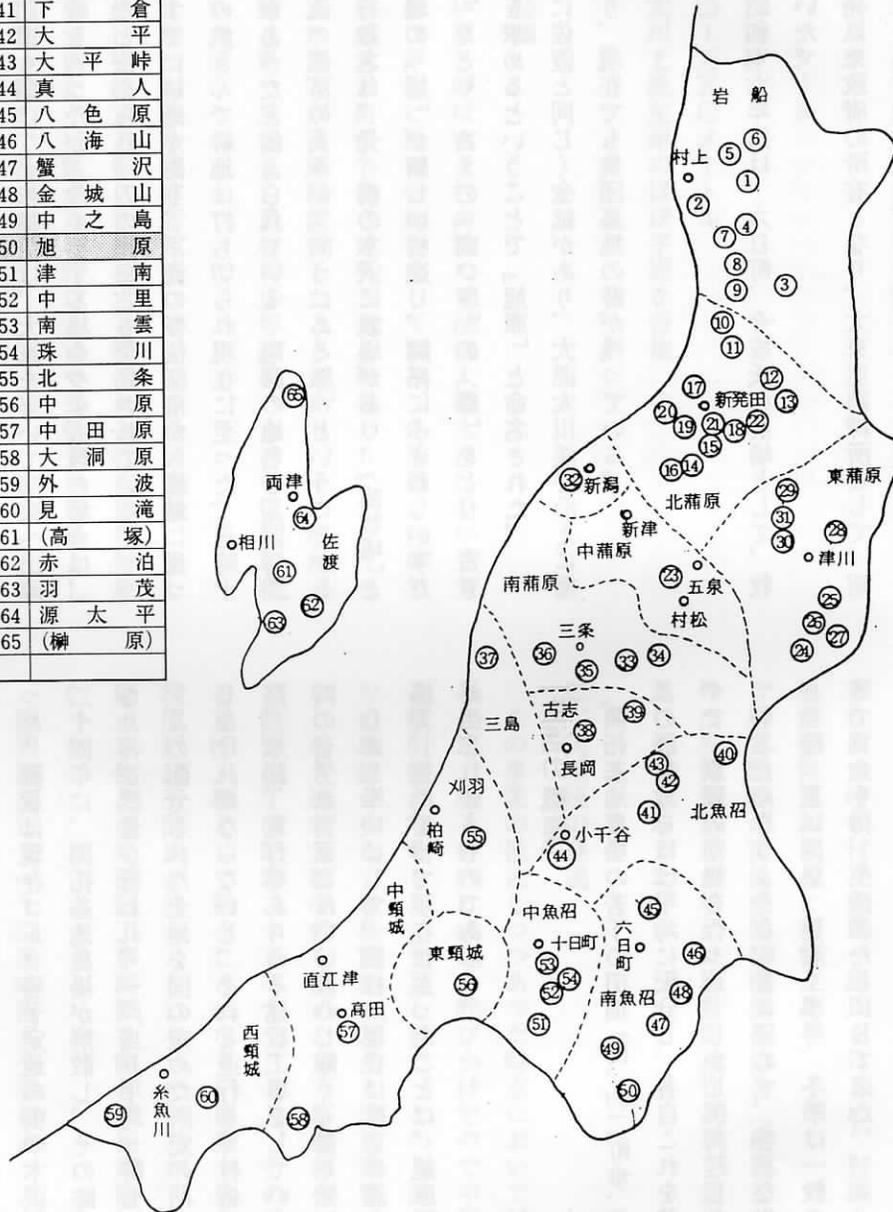
当時開墾された田畑も今は半減し、残った耕地のほとんどは、兼業農家で営まれている。

現在は、半世紀前とは全く正反対であり、食糧増産どころか、食糧減産を奨励する世の中である。強いていえばこの時点で、初代の役目は終わったように思われる。いつの日か同じ様な時代がやってきたとしても、一般農政の基、その手法は全く違ったものとなるだろう。

世の中が、どう変貌しても初代の血と汗の結晶であるこの大地は、永久不滅である。

新潟県開拓位置図

1	山 辺 里	34	原地区第二
2	(松 喜 和)	35	(鉢 伏)
3	松 平	36	西 野 新 田
4	関 谷 村	37	(寺 泊)
5	高 田 山	38	(栖 吉)
6	館 腰	39	(大 倉)
7	(新 屋)	40	入 広 瀬 村
8	高 坪	41	下 倉
9	(保 内)	42	大 平
10	中 条	43	大 平 峠
11	中 条 協 力	44	真 人
12	黒 川 村	45	八 色 原
13	黒 川 第 二	46	八 海 山
14	安 田 町	47	蟹 沢
15	大 日 原	48	金 城 山
16	(寺社山本新)	49	中 之 島
17	聖 籠 村	50	旭 原
18	畑 江	51	津 南 里
19	(大 宝 寺)	52	中 里
20	内 沼 湯	53	南 雲
21	新 発 田	54	珠 川
22	川 東	55	北 条
23	大 蒲 原	56	中 原
24	西 川 大 和	57	中 田 原
25	(東川村大倉)	58	大 洞 原
26	豊 川	59	外 波
27	滝 沢	60	見 滝
28	豊実村高森	61	(高 塚)
29	(三川村松野)	62	赤 泊
30	大 須 郷	63	羽 茂
31	(三川村吉津)	64	源 太 平
32	五 十 嵐 浜	65	(榊 原)
33	原地区第一		



旭原の概要

〔明治以前〕

旭原の地は台地であり、有史以前から集落が開けていたらしく、現在でも石器（矢じり、石おの等）や、土器（縄文式）が発掘され又、石器に利用された原石も現存する。

戦国時代には間道も開け、上杉謙信は、大軍を率いて関東へ出陣する時は、三国峠を通ったが、急を要する場合や少人数の場合は、旭原の地を通ったと伝えられ、刀の鏝なども発見されている。

徳川時代にはすでに耕地があり、下流の谷後部落から耕地に通っていたが、天保の飢きんで耕地は打ち切られ現在に至った。当時十町歩ほどの水田があったと伝えられている。旭原の地名を「向い原」というのは、下流の部落の人々が「向うにある原」ということから「旭原」という行政名は、元、桐の木沢に牧場があり、「旭牧場」と呼ばれ、その牧場の「旭」が新しい村造り、開拓にふさわしい字だといふので「旭」をとり、古えの「向い原」の「原」をとり、古きを尋ね、新しきを求めるということで「旭原」と命名された。

又、徳川時代に佐渡と同じく金鉱があり、大源太川溪谷沿えに掘った穴の跡があり、現在でも集団墓地の跡が残っている。

〔大正以後〕

大正年間より昭和十六年迄は、六日町、今成氏の農場として、牧場が経営されていた。

大東亜戦争勃発以来政府の所有となり、大東亜訓練所として、昭和十六年より二十一年まで、当時、満州の開拓を志す者、及び農村子弟の訓練が行われた。

終戦後、緊急開拓臨時措置法により、新潟県開拓基地農場として

開拓を志す者のため、県が昭和二十二年五月より二十三年四月まで開拓営農の基礎教育を行った。その教育を受けながら、自分達の住宅用材の搬出及び、土地の測量等を行った。搬出は二十三年三月頃旧村青年団の応援を得て、木取りから一戸当り百石余りを順調に行った。測量は現在ゴルフ場予定地の桐の木沢と板木の原であったが二十四年に、開拓基地農場が解散し、その跡地全部が旭原の土地となり再び測量が行われ、一戸当り平均一町七反を配分した。

この配分された土地を国の定めた所定の期日まで、原野の開墾をしなければならぬし、それと並行して村造りの基礎たる住宅、道路、水路、電灯等あらゆる建設工事をしていかなければならず、当時の苦勞は言葉にはいい表わし難く、量り知れぬものであった。

しかし幸いにして、旧村（現在は町）の温かい理解ある指導と、協力、援助を得て現在に至ったことは、旭原部落民一同の感謝は、終生忘れ難きものであろう。

〔生活の概要〕

開拓基地農場の若干の田畑（田、約二町歩、畑、約四町歩）があり、この既耕地をほぼ平均に配分し、各自これを基にして、食うや食わずで、原野の開墾を行った。しかし折角起した土地は、地味がやせているため思うような収量は望めず、容易な生活でなかつた。

当時、夏は開墾、建設工事等、冬季は一般の村と同じく、藁仕事等で賃金を得、生活のたしにして来た。

飲料水は水道が設けられるまでは、部落の清流を利用していた。

旭原入植後の経緯

工事区分 代行地区

着工年度 昭和二十二年度（県農業会委託）

地区面積 九二ヘクタール

開墾計画 五三ヘクタール

入植計画 入植二四戸

標高 五〇〇～五五〇メートル

地形 大源太川上流左岸のほぼ平坦な台地
開墾農協 旭原

一、地区設定の経緯

この地区は向い原と呼ばれた村有地で、溪流大源太川に沿い三方を山に囲まれたほぼ平坦に近い台地をなしており、冬季節を除いては快適な環境で戦前六日町の名士今成拓三氏（戦後ビルマのパイモ長官を一時かくまった）が農場経営をしたことがあり、その廃屋と共に戦中戦後を通じ県で主催した農村青少年練成のための道場的宿泊施設が残っていた。

戦後、土樽村に帰った戦争犠牲者救済には、この地区を県に貸していたため、対岸に接続する桐ノ木沢板木と呼ばれる村有地を対象に一部開墾を始めていたが、県からの呼びかけで基幹入植用地として開発することになったのであった。

昭和二十二年の初期、農林省では前年度実施した開拓増産隊の構想を改め、基幹入植者の訓練と称し、おおむね一年間開拓基地農場に収容訓練の後、集団入植を図り一般入植者の教導規範の役割を果させようとし、これには若干の国費助成を加えることになった。

この地区はこの構想を実施するための必要施設は既にあり、そのまま、その周辺に入植できる好個の適地といつてよく、県からの申入れに当時の村長南雲一郎氏をはじめ、村議会も快く同意され、用地が提供されることになった。

講習訓練の実施機関は県開拓協会（総務若井千代松氏）とし、その出先開拓基地農場には場長間治作氏以下数名が当ることとして発足したのであった。

二、入植後の経過

この事業の低迷しつつあった時点において村勢発展のための一石として、広く村内に決起を呼びかけたので中堅農家の二、三男及び一部引揚者等をもって充足し得た。この人達の素質は良好であったため摩擦が少なく戦後開拓の理念と実施業務について教習すると共にこの人達の入植準備を進めたが万事好都合に進展したといえる。

教習終了は昭和二十二年十二月とし、その後は県農業会委託による集団入植として扱うことになり、事業主体の責任者には当時の助役原沢政五郎氏が当ることになっていたが、次年度以降委託制度が廃止されたので建設工事関係を除き開拓農協による自主的運営にはいった。

講習開拓以来一、二名の出入交替はあったが他はほとんど欠けることなく、農場勤務の農夫二名を加えた二四戸が一戸脱線、脱落者も出さず終始していることは、当初の基幹入植集落としての面目を全うし得たものといえる。

入植施設としての住宅（二十三年）、電気（二十五年）分教場（二十六年）導入に際し、村は村有林の用材を格安に提供された。

旭原入植後の経緯

この用材提供により建物などは、堅固な施行をなし得たので豪雪地帯でありながら多年使用した現在も当初の骨組みのまま、完全に利用していられるのは全く村の恩恵と感謝されている。

地区面積も大きく入植のみ配分で当時としては十分な農地配分とみられたが、礫（れき）を多量に含むところが多く開墾は相当骨が折れたようであった。

開墾後はそば、あわ等の雑穀や豆類、陸稻等を主につけ、養蚕、養鶏、養豚等も入れ、一時乳牛もかなりはあったが、積雪時の搬出難のため永続し得なかったようである。

地区計画にも開田計画があったので昭和二十三―二十五年にかけておよそ5ヘクタールの水田を開いたが、高冷地の冷水で収量伸びず、ようやく自給米確保の程度であったので一次振興では、開拓改良事業で飲料水と温水ため池を要請し昭和三十五―三十八年の間に完遂し、昭和四十年までに開田を追加、現在一三ヘクタールを保有し、反収平均六俵（最高九俵）をあげている。

三、終末期の状況

二次振興は昭和三十八年度地域指定で養蚕及び畜産関係で一〇戸が認定になり、それぞれ希望の融資を受けたが、中には自発的に借り入れを辞退したものもある。

全体的にこの組合のふん囲気は極度に借入金を警戒し、石橋をたいて渡る用心深さで一部には消極的との批判もあったが、それだけに誠実な人達で、発足以来いまだかつて各種資金に延滞を生じた事例はなく、北魚沼の下倉組合と共に昭和四十二年度組合表彰を受けている。

また既在部落から孤立した集落であるが開拓者、特に婦人部の活躍が目ざましく、環境衛生ないし日常生活に改善を加え、住みよい郷土建設に努めているが、これらのリーダーとして情熱を傾けて善導された分教場の伊藤キクエ先生は、その功により昭和三十九年度県振興大会の時、県知事から個人表彰が贈られた。

終末期にはいった現在農家所得の状況からみれば、必ずしも満足すべき段階に達したとは言いが、米、養蚕又は育成牛を柱にし、畑作には夏だいこんやスイートコーンが主になり、その他わさび、なめこ、しいたけ等も試みてかなりの実績をあげている者もあり、楽しみながら営みを続けている姿といえる。その前進速度は遅くとも大地に深く根を張ったたくましく堅実な一歩一歩を進めているとみられる立派な地区である。

組合設立以来組合長には、ほとんど全員が一年交替で就任し、延滞がないだけに経理上の混乱もなく又一戸の脱落者も出さず、円満平和の内に現在に至った。

〔戦後のあゆみ〕より抜粋。
昭和四十五年三月二十五日 新潟県発刊

入植施設補助事業の概要

一、住宅の建設

新築住宅の建設に対する助成は、緊急開拓実施要項の施行と同時に定額国庫三、〇〇〇円の補助がなされたが、昭和二十一年～二十二年度は三、〇〇〇円補助に七、〇〇〇円の開拓資金（住宅資金五年据置十五年償還利率三分六厘五毛）を貸付けて住宅の建設を促進した。これらの住宅の建設工事は委託事業時代は農地開発営団、県農業会、村農会が事業主体として実施したが、開拓事業の進むにつれて実態に即した改正がくり返され、開拓組合の事業主体で実施してきたが、昭和三十七年度から開拓者個人の事業主体として建設にあたらせた。

二、飲用雑用水施設

昭和二十三年度から開拓地区計画が樹立されるや、飲用雑用水施設事業は建設工事に含まれ実施された。

しかしながら、地区が小さいか、または散在しておるために建設工事の採択基準に該当しない地区が多く、採択外となった分については昭和二十九年度から共同井戸のみでなく、導配水施設についても入植施設事業予算に基づき、一戸当り三〇、〇〇〇円以上の事業費を伴う施設設置費がその助成対象となり、補助率は昭和二十年から昭和二十二年度までの共同井戸については一〇〇%、その後は事業費の五〇%で国費のみであった。

三、電気施設

入植初期はランプ生活を余儀なくされており、灯油の不足のみで

なく子供の教育はもろんのこと、夜間の家事にもこと欠き、これがために営農振興がとすると阻害されておったが、昭和二十六年から国、県の助成制度が法制化された結果、昭和四十一年までに全戸点燈が完了してラジオ、テレビは言うにおよばず、電化製品が次第に導入され、文化生活が営めるまでにいたった。補助率は三分の二から七〇%にまで引上げられた結果、無点灯団地解消の速度を早めたと言えましょう。

四、分教場設置

入植初期開拓者もつとも頭痛のたねとなった点は子弟の教育であった。特に山間へき地の開拓地に住む児童は村里の学校まで丈余の積雪を踏んで朝早く家を出、夕方暗くなって帰宅するいたましい生活のために疲労しきって勉強はとかくおろそかにされておった。これらの実態から、学童の生活環境の向上と福祉、ならびに教育が国民全体に与えられた義務という観点から昭和二十年度に小中学校分教場建設に対する補助制度が制定された結果、開拓者の子弟の通学の便ならしめるために、市町村が建設する分教場に限り補助率八〇%の助成がなされた。

開拓当時の事業の概要(旭原地区)

(単位：千円)

工事名	工事種別	実施年度	数量	事業費	補助金		
					国費	県費	合計
土木工事	導水路工	23~24	1,480m	938			
	幹線道路工	25~26	3,056m	420			
	工事雑費	24~26		17			
	小計			1,375	1,375		1,375
建築工事	新築住宅	23	23棟		645		645
	災害復旧住宅		1棟		39		39
	分教所		1棟		400		400
	災害復旧畜舎		1棟		26		26
	小計				1,110		1,110
附帯工事	排水路	28	1,259m	232			
	工事雑費	28		8			
	小計			240	120		120
開拓地改良	水道施設	35	1ヶ所	1,293			
	開田施設	36~38	溜池2ヶ所	7,072			
	電気施設		24戸	258	30		30
	建物施設		4件	4,044	1,505		1,505
	用地補償			652			
	工事雑費			456			
	小計			13,775	7,850	1,579	9,429
道路補修	幹線道路	30	1,760m	645	430		430
開墾作業	開墾作業	23~27	田 12.26ha 畑 25.10ha	3,568	2,523		2,523
合 計				37,993	16,053	1,579	17,632

50年のあみゆ

昭				和												
54年12月	54年 50年3月27日	49年12月 5月5日	48年6月30日 8月	47年8月 6月2日	46年5月3日	43年4月4日 12月3日	42年5月21日 8月12日 12月15日	41年5月7日 9月10日	40年8月27日	39年6月3日	37年6月5日					
村内道路改良始まる（5号線）	この頃機械田植機導入される	旭原分校閉校式挙行 消防団加入	旭原部落無雪道路となる この年1月10日迄積雪無し	各家庭電話通ずる	日本青少年旅行村開村式挙行	部落観桜会開催（以後恒例） 集団風邪発生	こくせ坂改良工事	冬季分校開設、5、6年生通学 5、6年生本校通学開始	雪上車初めて来村	入植20周年記念祝賀会挙行	炭焼小屋付近で山火事発生	こくせ坂工事行われる	台風23号で大被害を受ける。	無料診察（以後恒例）	学校石炭置き場完成	ミルク給食開始
	53年4月	49年11月3日			44年			41年		39年6月	38年5月20日	37年4月				
	県立湯沢高等学校発足	土樽小学校創立百周年記念式典			アポロ2号月面着陸成功			国道17号線全線開通		東京オリンピック開催	新潟地震発生	給食室竣工	湯沢中学校新校舎完成			

50年のあみゆ

平		成		昭		和																									
7年	12月	5年5月6日	12月	4年4月	3年4月	2年11月	5月	元年5月	61年11月9日	59年8月	12月	58年8月	年月日																		
コクセ坂道路改良 下堰改良工事実施		村内町道全線消雪パイプとなる		取扱について町内会に一任する旨確認される		村から移住した人達は共有地(墓地は除く)の		旭原福祉工場開設		旅行村の会計部門も委託となる		同年看板設置(町より補助)		ツツジ植樹四二〇本村内全員出動		墓地一班分整地する		そうめん流しキャンプ場管理委託請負う		旭会主催町内旅行開催 草津熱帯園		村内除雪始まる(外廻週一、二回)		墓地班分け 標識杭を入れる		村内一六号線四種除雪路線となる		グラウンドに始めて遊具設置される		旭原の動き	
9年6月1日	7年1月17日	6年				3年9月			64年1月7日	60年		58年9月	57年	年月日																	
1号ダム部分解禁となる		阪神大震災		1号ダムに鑑賞用鱒放流 以後禁漁区になる		県道の井戸掘削消雪パイプとなる		昭和天皇崩御 元号平成となる		関越自動車道全線開通		向原橋橋台工事始まる		上越新幹線開業		その他のできごと															

五十年時によせて

清水正

●50年のあゆみ

大源太と共に(回想)

大源太と共に(回想) 清水正

大源太と共に(回想)

五十年誌によせて

清水 正 三

お祭りは、音頭取りが何より大事。

この度は、開拓五十周年記念祭の発案が旭会「開拓者二世集団」により行われることが決定と聴き「ようやくしてくれる、たいしたもんじゃ。」と、驚きと感謝の気持ち湧き出てきました。俺達五十年の暮らしもまんざら捨てたものでもない、何等かの要に成っていると、自信を持って生きている今日この頃でございます。本当に有難うございます。五十周年記念事業、皆様のご芳志をお願い申し上げます。他力本願に依る事例ばやりのこの頃、自力に依って完成させる、各自の責任と自覚により、昔の言うところのオテンマに依って完成を見る。

ある情景を思い浮かび出します。上の水路を掘り終わり水を引き入れた。滔々と流れる水頭が今の温水池の下方、落着地点に着いた時、期せずして全員原っぱに向かって「水が来たぞー」と腹の底から叫んだ時の感激を、若い皆様にも味わって貰いたいと祈っています。

開拓誌作りの話に刺激されて、五十年前よりこのかた過ぎし日を一考したとき、重要なこと、大事なことを、いつ頃であったか覚えていないことに気付きます。例えば開墾検査は何年何月か、売り渡し許可がいつか、反当り価格は何ほどか、共同林を各自に配分する

時の申し合わせ事項、採草地配分の時の申し合わせ事項等必ず何かあった筈だ。皆が快く認めあい「これで良し」と合意できた背後には、必ず何等かの話し合いがあったことは間違いない事実であるが記録がない。

偉い人がテレビで教えてくれました。「栄枯盛衰常ならず。」力によつて時に制しても崩れることがきつと来る。正しい情報と、自己反省を繰り返し、あまり古くならない間に解決を図ることを望むために十年に一回位い過去帳を作ることが望ましいと思う。常に隣の人と仲良く円満に暮らしていけるように努力していきたいものと思います。

開拓者の今昔物語

昔川水飲んで芋食つて病氣もせず生きてきた。

ドラム缶で汗流しランプの下で糞仕事暇に浮かぶ其の時代

今コシヒカリでマグロ食べ 納豆汁さ焼き魚 晩酌飲んで赤い顔
それでも美味しいとは思わない。

電気、洗濯機、冷蔵庫、電気毛布に羽布団

健康マットで夢を見る。それでも楽と思わない。

旭原分校跡地にひっそりと建っている歌碑について書いておきたいと思います。

人は、挨拶によつて付き合いが始まるといいます。「お前さんはどこから来たんだ。」これが二人の新宅さんと〇〇さんとの付き合いの始まりでした。見知らぬ他国の釣り人と釣り好きの新宅さんが意気投合して「俺の家に泊まって行け」「それでは宜しくお願いします。」と気軽に話ができる仲間になるには、そう時間がかからなかった。昭和五十年頃の話であります。他国の釣り人の三年前に

来たとき有った学校が無くなっている。月日が過ぎるといろいろな出来事のために学校のあったところが判らなくなってしまう。惜しいことをしたと思うことが必ずある。故に、ここに学校があったと記念碑を建てておいた方がよいとの忠告、他国の釣り人は、私財を投じて歌碑を造られた。遠い将来いつの日かここに旭原分校があった事を認する歌碑。

今は、廻りの草を引っこ抜いてバチと太鼓の音に耳を澄ませて聴くことのみ。

私の思い出の数々

原澤義定

昭和二十三年五月一日に板木河原に小屋を建てて親子三人の生活が始まる。

河原には、並木牛若丸さんと南雲傳治さん、片桐留吉さん、並木晴政さんの五人が小屋生活をやり、毎日共同作業をやる。その他の人達は、下の堰のそばに庄一郎さん、樋口喜太郎さん、星さん、腰越一エ門さん、木平治さん、宗十郎さん達が小屋を建ててはいる。

共同作業は、製材所の手伝いをやる。其れがない日は自分たちの屋敷の仕事、建前の準備に追われて忙しくやる。家の建築は、大崎の池田大工さんが屋根屋から左官から全部の請負をやり、分校を入れて二三軒の建前をやる。一日五軒も建てることもある。皆が大工

さんに追われる。八月の末に全部建て終わり各人が自分たちの家に入る。暫くはランプ生活をやり、そのうちに電気も入りお陰で明るい生活が出来るようになり皆が大喜びでした。共同作業で三号ダムから水を引くために各人に堰堀の割り当があった。部落まで掘り水が流れる音がした時は、とても嬉しかった。今までの堰からくみ水をしていたのが、水が音を立てて流れるようになり、風呂も立てて入れるようになった。風呂のない人は、風呂のある家に行つて入れて貰い皆が喜ぶ。やっと人間の生活が出来るようになる。

二十八年の四月に旭原分校が出来て開校式があり、朝子を連れて入学させる。先生は、関先生が奥さんを連れてきてくれる。始まりは先生一人に生徒一人である。私が記念に校門の所に松の木を植えたのが、今では大木になっております。

二十八年に私が旭原開拓組合長になり皆が共同で山先方面の水路掘をやる。上の堰は、谷後の平間さんが請け負って工事をやる。下の堰は、小坂の鹿造さんが請負をやり、コンクリート工事をやる。

今の駐車場のあったところに、部落共同の作業所を建てるので、請負人二人が出て入札をし、小坂のえびす屋さんが落札をし、仕事をやることになった。大工さんは、土樽の大工さんが建ててくれた。秋までには、部落共同の機械が小出の機械屋からはいる。脱穀機と調製機、精米機が入り、秋の稲ごったくは、皆が作業所でやる。作業所の下りに消防小屋を建て、其の当時南雲喜一郎さんが消防の団長をしていたので、中古の手もみポンプを入れてくれる。その年から旭原に、消防団が出来て団長に宗十郎さんがなる。半鐘がないので中里の線路班から線路の切りをもらって、半鐘のかわりとして使う。

この地と共に(回想)

二十八年は、とても忙しい年でした。

その後鶏飼いから豚、山羊、めんよう、和牛が導入された。和牛で畑仕事、田の仕事も全部やるようになり、鋤を使わないようになる。その後乳牛が導入されて、乳搾りが始まる。忠重さんと長夫さんが乳牛を飼い三人で乳搾りをやり、毎日湯沢まで行って来る。夏はこく勢の坂まで丸通に頼む。冬は毎日三人で出していたのが、一人やめ二人やめして私一人になった。冬は谷後まで道を踏みながら行き、雪の多いときは谷後まで半日かかることがあった。帰りは郵便物を持って、谷後、旭原部落に配って自分の家につけば真っ暗になる日が多くあった。

一生忘れられない思い出でした。

思い出

片桐ユキ

私は、昭和二十五年縁あって、旭原の住民となりました。当時は食糧不足で、誰もかれも大変だった。あー米が欲しい、田んぼが欲しいと何回も思いました。部落の人皆が一生懸命、田んぼ作りをしました。

昭和三十年頃薪ストーブがはりました。どこの家でも屋根に煙突が立ちました。煙がでない家は、母ちゃん下へおりて留守かなーとすぐわかりました。大昔、天智天皇だったか? 「豊かに立ち上が

る煙を見て安心した。」の話を思い出したこともあった。

分校で、関先生の時代に、部落の父さん達が歌の会をやりまして。故腰越一エ門さんが、「夕暮れに、泊りに来たか、寒すずめ」と詠んだ詩を、「なるほど」と覚えております。母ちゃん達も歌を作りました。大したものですよ。すばらしかったです。その頃分校にテレビが入りました。「名犬ラッシー」を見たくて、子供達は、薪一本づつ持って、毎晩学校へ見に行きました。

三十四年九月二十六日は、大人も子供も、部落上げての大運動会がありました。父ちゃん達はさんばくに地下足袋、母ちゃん達もさんばくに地下足袋で。本校から教頭先生(大塚佑三)が来られ、伊藤キクエ先生を先頭に、タンタカターンと入場行進は、感動のひとつでした。私と米子さんは、まゆみさんとミサオが腹にいたので、とぶことが出来ず雑用でした。翌日から南東の風が強く、皆で学校に避難しました。一睡もせず夜の明けのを待って、自分の家に帰ってみたら、腰が抜けるようだった。戸ははずれ、壁は落ち、屋根には何一つ無く全く大変だった。皆で助け合って頑張りました。「伊勢湾台風」です。

三十五年には、夢にも思わぬ耕耘機が部落に入りました。

学校のストーブを囲んで、毎年新年会がありました。子供の好きなカレーライス一品持ち寄り、お茶を飲み皆で歌ったり、踊ったり、それはそれは楽しかったです。給食を運んでくれる萩野屋さん、飲み会には欠かせない人でした。

秋の自動車洗いの時は、一人二合ぐらい餅米を出して、大きな大福を作り、腹一杯食べて歌ったり、踊ったりまるで、おとぎの国へ行ったようだった。考えてみれば、五十年は長いようで短いよう

な、もう頭は白く腰は曲がり、時々昔を思い出すときもある。誰が名付けたか、旭原部落名はとても素敵だと思えます。

旭原開拓史上一番の

喜びについて

並木晴政

入植してから早くも五十年、半世紀となりました。今、過去を振り返り想い起こす時にあまりにも多くの事柄が、走馬灯の如く臉の裏に浮かびでて参ります。その中で最も嬉しく感じ又、現在でもそのお陰でこの村も世間並みに生活できるまでに発展し、若い世代の人達と一緒に暮らしていきけるようになりました。それは電気だと思えます。

私どもが入植したのが昭和二十二年六月でした。その年の秋から、住宅建築の為の材木の伐り出しから始まり、二十三年に住宅が完工し、二十四年秋に待望の電気工事が完了して各戸に二個所の電灯が灯りました。村中喜びに沸き上がりました。特に私は昭和十七年から満州そして、シベリアと七年間も電気のないところで生活をしておりましたので、皆さんより強く喜びを感じました。この電気之恩恵により電灯を始めテレビ、洗濯機、冷蔵庫と次々に家電製品が入り、文化生活が営まれるようになりました。

電気と無関係の青春時代を過ごした者にとっては、正に文明文化の世の中と実感し感謝しながら毎日使用しております。

この電気工事完了の日のことは、生涯忘れることはないでしょう。他にも道路、水路、学校等数限りなく歴史に残る建設工事が次々と完成されて、今日の旭原ができました。あの一戸二灯の小さな電球の明かりは、それまでランプ生活を送っていた私共には何よりも嬉しく又、有り難く感じたのは、私一人ではなかったことと思えます。

五十年を迎えて

今村清子

戦後五十二年、入植五十二年、大いに関係深いことなのですが、私は終戦の年、まだ四歳だったので、あまりその苦しみがないんです。私は、昭和三十九年秋、こちらに嫁いできました。そしてその年は、東京オリンピックの年でした。もうその頃は、入植当時からすれば、二十年近く経っていたので、いろんな面で良くなっていたのでしようが、それでも一番感じたのは道路でした。こく勢坂は、雨で土が流されて河原のようでした。父さんのバイクの後ろに乗せてもらうと、お尻が飛び上がって振り落とされるようでした。数年経って、道も徐々に良くなったけれど、舗装になるまでには、時間がかかりました。ある日、小荷物が届いたとの連絡がありました。當時は、中里駅前の、日通まで取りに行かなくてはならず、免許取り立てのバイクに乗っていきました。帰りにこく勢坂のカーブを曲が

大源太と共に(回想)

りきれず転び、マフラーがつぶれてしまいました。バイクのケガで、私の財布は、大きな口を開けて：。「折角の小荷物を」と、道を恨めしく思ったけれど、今は笑える思いとなりました。その後、道も年々良くなり、そして何事も便利になりました。荷物を受け取りに行くことも、出しに行く必要もなく、居ながらにして用が足せるようになりました。朝、出した荷物は、翌日の十時頃着いたとの電話、「わー早い」と思いつつ、嬉しくなっています。

便利になったお陰で、数年前、バイクも蒸発しました。警察に届けて、二、三日で見つかりましたが、ドロさんの余罪調査のために、帰ってきたのは十日後でした。バイクの鍵も玄関の鍵も、きちんと掛けるよう、お巡りさんに注意されました。

道にまつわる思いで、まだまだありますが、これからも、先輩方の昔話、たくさん聞きたいと思います。

開拓によせて

南 雲 二喜雄

私たち旭原にとって、谷後部落との関係は、非常に深い関係があったものと考えられます。

谷後部落の昔は、一二五戸もあったそうなの。向原、桐ノ木沢、板木原、中平等を開拓していたらしい。開拓といっても焼き畑程度の耕作であったように考えられる。その点は、あっちこっちに石の

寄せ集めた跡があり、何よりの現実である。

パークゴルフ場の建設の時見かけたのですが、一一ホールの中頃とすぐ横の管理道路の当りに水田の跡が見えた。多分、芝倉の沢から水を引っ張ったのであろう。ところが、天保の災害で皆、死に滅び現在の戸数になったと、私たちは、老人から耳にしました。

その後、桐ノ木沢には滝又の長九郎さんという人が、牧場を経営していたとのこと。これも、ゴルフ場建設前に土手があったのでよくわかる。

向原の平らは、六日町の今成さんという人が来て、今成農場をやっています。その事は、私たちの年頃で有れば、誰もが知っています。原っぱの真ん中に牛が昼寝をしていて、通る人は困ったこともあったと、話は聞いている。

昭和二十年八月十五日、日本は戦争に敗れた。そしてアメリカ国から、マッカーサー元帥という人が来て、日本国の総指揮に当たった。敗戦になったので、満州からの帰国者、又は軍人の帰国者等で人口は増した。

マッカーサー元帥は、日本財閥の解体と合わせて、日本全国の食糧増産に満ちていた。当時の水田の収量は、二〇〇kg/反前後程度しかなかったようであった。衣服とか時計とかが欲しい時には、米、大豆等で、物々交換していた。

国の方針として、開拓に努力するように、時代の流れが変わってきた。昭和二十年頃より板木原を中心にした、開拓部落の話がでてきた。土樽村長を始め村会議員の人たち、中子の電機や(忠重の親)、原沢政五郎(義定の親)、腰越一エ門その他多くの人が集まって、この件について真剣に協議し、目的に向かって真一文字に進ん

でこられました。

昭和二十二年五月より新潟県開拓基地農場に、開拓基幹講習生として、一年間の入校が決まって二四戸が入植になった。全員宿泊して此に当たった。

七月頃若い人六、七人が板木原、桐ノ木沢、東中平等の土地の測量に参加した。木取の村有地の杉の木を、住宅建設用の材料として村より払い下げて貰うようお願いしていたのが、申請通り許可が下りる。八月から建設資材の伐採に入り仕事は、忙しくなってきた。当時材木単価は、一石当たり五十円という安い値段で払い下げて貰いました。伐採した資材の運搬は、土樽村の青年団の力を借り、本当に有難うございました。新潟県開拓基地農場が閉鎖になり、当時の計画即ち、板木原を中心とした考えが、一変して向原の平地及び佐久茅沢の開放に話が進み、現在のようになりました。

測量の結果、第三ダムより用水を引水するよう働きかけ、やっとの事で水路が完成した次第です。水路建設は、割り当てられた場所を、自分たちで掘るといふ事もありました。水が部落に通ったときは、何よりも有り難く、あの濁水が流れついたときの嬉しさは、忘れることは出来ませんでした。

昭和二十三年には、今の振興センターで木材の製材を始めました。大崎から大工さんも入り、急に、旭原に意気が上がってきました。

県の開拓課より、開墾するよう、毎日のように書類が送付されてきました。私たち独り者は、実家から毎日のように応援の人たちが来ましたから、それでも大変楽でした。しかし、世帯を持った人達は、本当に苦しい毎日であつたらうと、目の当りに実感しました。

電灯もつきました。しかし、一戸に対して二灯くらいしか有りませんでした。

県開拓基地農場の所持していた耕地を、取り敢えず各人に五畝ずつを配分し、食糧の確保に努める次第であつた。

先ずは、少しずつ水田を造り、自給自足に努めた。

昭和二十七、八年頃までは現金収入は少なく、子供達のいる家庭では、大変に厳しいものであつたでしょう。

昭和三十四、五年頃にテレビが入つて来た。前の山に、アンテナを付けて、共同で取り付けたこともあつた。

土樽村では、取り敢えずの収入源はなく、第一の収入源は、冬期間の出稼ぎに頼る他なく、ほとんどの人達は、東京に行き、春先の四月頃まで稼いでいました。

昭和三十二、三年頃からスキー場の建設が始まり、徐々にスキー場に勤めるようになり、現在のように成りつつありました。

いま思えば、冬は谷後の水路脇が道路で、夏は小坂の水路脇が道路であつたり、本当に思い出深いことばかりです。

建設に際しては、土樽村の皆々様に、特別のご支援、ご協力を頂戴いたしましたことを、心より御礼申し上げます。今後とも宜しくご指導のほどをお願い申し上げます。

住宅建設のとき

小野塚 憲 昭

天気が良かった。大源太山の紅葉がきれいに成りだした。田圃の帰り道、ボンヤリと村中の県道をぶらぶら歩きながら、西側に並ぶ家々をアッチコッチ見しまにきた。

高床の上に立派な二階屋、屋根や壁の色の美しいハイカラな家、こつちには伝統的なせいがい造り、一寸変わった煙突のある家等々、普段見慣れているなげない、いつもの村の姿だった。家の前について腰を下ろして一服する。自分の家を見ながらフツと昔の家造りのことを思い出した。

入植して、家造りが始まったのは五十余年も前の話だった。当時、あたり一面雑木、特にナラの木が多かった。他に芽、雑草の茂った原野であつたけ、ここに一反部くらいずつの区分けをして、クジ引きかなんだったかで、個人の場所が決定した。それぞれの家造りが始まった。手始めは、雑木を伐り、草を刈ってそれらしい場所を確保してみる。屋敷として貰った用地の、区画線があつたりで、それらを見比べながらようやく位置が決まった。なにしろ雑木、雑草の茂った真ん中での仕事だったので、なかなか大変だった。自分一人くらいでは、とても無理なので、いつも実家の親兄弟の手を借りた。当たり近所の人達もだいたいこんな様なやり方だった。道具だつていまと違って、いろいろな物がない、「唐鋏、ツルハシ、

鉋、鎌」程度、掘った土、石は、縄モッコに入れて引っ張ってきて低いところへ運んだ。いま、あるような一輪車でもあればなーと思ひ出すほど、難儀な仕事だった。

又、この当たりは、赤蜂の巣があつちこつちあつて、やたらに腰もつけない。うっかり弁当を地べたに置いて、すっかり蜂に入られてしかたなく、実家まで昼上がりをしたことがあつた。それから、必ず木にぶら下げるようにした。それでも木に登ってくる蜂も多くて、安心できる場所ではなかつた。仕事もさっぱりハカチがなかなかつたようでも、手間と日数が掛かつたが、何とかそれらしい形が出来始めた。土台石も何とか集めて、大工さんが出てくれた、水系の位置に並べて、隣近所の人と共同で、石バカチの様なものとした。大勢で、ワイワイとタコ突きをして、丁度水平になるまで突くと、吉兵衛どんのじいちゃんがチョンチョンと拍子木を打って合図してくれた。

いろいろなことから、困ったときは、みんなで力を合わせて解決したり、又、手伝いを貰つたりで、何とか基礎づくりが終わつた。この後、肝心の家造りが控えている。一生一度の大仕事だと思つた。当時の家は確か、二間半の五間に玄関、水場程度だったように思う。今日の前の家、家を見つめ、過ぎた五十年の年月を、今更ながらかみしめる。

大源太と共に(回想)

(原稿)と共に太源大

私の思いで

高橋 一雄

昭和二十二年七月十日に、向原へ基幹入植して約六ヶ月、農業の見習をしながら共同生活をしていた頃が、懐かしく思います。又私は、二十五歳の時病気をしまして、旭原の皆様には、大変お世話になりました。小坂に転居してからも、旭原が懐かしく忘れたことはありません。時には遊びにも行っています。

私も今は、幸せに暮らしています。旭原の皆さん、小坂に来た時は、寄って下さい。お待ちしております。

旭原の皆さんのご健康を心よりお祈りいたします。

雲雀たつ荒野に夢を開き来て

なお果ても無く 老いさらばゆも

いつの日か陽炎もえる向原

また還りきて 土 耕さむ

一九九七年

一畳庵 素風
(高野忠重)



入植当時の今は亡き樋口義政氏